

2023年2月

中村和弘

<魔王>

白壁に車軸の影を初日かな
屋根石の一つ一つに初日かな
中空に蜘蛛の木乃伊か冬の月
北溟にいつもロシアぞ寒波くる
香具山に鳶の争う初御空
魔王てふ紅梅咲きて村沈む
天窓にふくら雀の腹白し

大石雄鬼

<鎖骨あり>

よく晴れて桜紅葉のぶつかり来
卓袱台の脚をのばせば冬ざる
生家より出でがらがらと大焚火
雪の夜をごくんごくと男来る
のどかな背に雪の末路の降りてくる
狐火のかたむきながら鎖骨あり
クリスマスイブの港の草伸びし

陸・この20句 中村和弘選

万太郎の書のやうに紙魚走りけり	大類つとむ
湯のたぎる音に郷愁冬となる	永井アイ子
塵取を持って聖夜の暗がりに	吉本のぶこ
秋の舟うらがえされて木のからだ	瀬間陽子
ヒマラヤの岩塩朱鷺色良夜かな	石川真木子
加湿器の青き目玉や秋澄めり	小竹ヒサ子
兜煮の鯛の目玉もクリスマス	上田 桜

さまよえる糺の雪の蒼さかな	小川葉子
秋空を亀搔くビルの水族館	今田 克
透きとおりそうな柿より夜のくる	佐々木貴子
黒姫山をコスモス包む妻あらず	徳竹三三男
秋風を補聴器がうけ尚孤独	本多洋子
鉄鉢のかくも冷たきしぐれかな	猪狩鳳保
燻し銀の屋根連なれり冬満月	阿部雅子
雪降るや風の輪郭描きつつ	桜田花音
息つぐ度プールの窓に翳雲	伊藤岳栄
補聴器を外せば消える虫の闇	清水山植子
芋掘りの黒土高く飛びにけり	池崎昌子
上積みの落葉楕円の風の面	内海 新
助手席に光さし込む神無月	清水りま

2023年1月

中村和弘

<花の春>

上野動物園

黄落へ虎の頭骨据えてあり
閘門の蘇青々と冬に入る
寒雀鼠のごとく走りけり
少年の頭踏むかに寒鳥
寒垢離や鳥数羽が喚き翔つ
冬蜘蛛をあつと掃除機吸いこめり
駝鳥一羽が韋駄天走り小春かな
人間の隙間に蜘蛛の冬眠す
海中に島そだちつつ初日かな
核塵は地底に蔵し花の春

大石雄鬼

<夜中>

イソップ童話長月の胡椒振る
三日月のたむろしてゐる九十九塚
身体のほのかな灯り鶴来る
寒月の沈みしやうな皿がある
着ぶくれし人のあつまる荒物屋
末枯れてわが葉脈の太かりし
寒鯉の夜中のやうな匂ひかな

陸・この20句 中村和弘選

徘徊の掟のやうに芒持つ	小菅白藤
大陸の突端は竜砧打つ	瀬間陽子
交響曲レニングラード冬に入る	山本高分子
長城も鬼城も聳え天高し	今田述
ゴルバチョフと同じ歩行器秋の声	小木曾あや子
長き穂を持って余すかに古代米	大野和加子
鴉鳴いて全山はたと静もれり	牧 ひろし

栗握る父の手さらに丸くなる 鎌田史子
月光の輝く神戸二泊する 大久保八千代

水族館

秋うらら餌づけの男肢体美し 本多洋子
秋霖雨前髪眉を隠すなり 石堂つね子
目をつむることなく鹿の角切らる 猪狩鳳保
ビニールに透けたる雨の帯祭 北原千枝
かたまりて鶏頭流る車窓かな 古川章雨
漆黒の海亀の町星飛び 土岐詳恵
朝日浴び生まれたてなる松ふぐり 平恵
爽やかやアンモナイトのシャツ走る 宇佐川うさこ
柿の樹より邯鄲歌ふ夢路かな 伊藤岳栄
ドビッシー黒豹吠える十三夜 瀬間ろ敏
馬追の髭まで緑そよぎけり 百目鬼英明